

第四章 季語について

日本の四季

日本は四期が移ろい、春夏秋冬のけじめのはっきりした国土にあります。またその四季をそれぞれの自然の豊かで美しいこともよく知られています。近年はそれをそこなう自然破壊などが進んできましたが、大勢としてはまだまだ美しい自然に恵まれていると言って良いでしょう。

私たちの祖先はその自然の中に神が宿ると信じ、それをほめ讃える歌をたくさん作ってきました。それとともに自分たち自身も自然の中で自然とともにあるものとして歌いました。そういう日本人の自然観は時代とともに変わってきましたけれど、今だに変わらないのは身近な自然を愛し感動する心です。

文字を得て書き記すことができるようになって以来、どれほど多くの山や川や、鳥や花を歌った歌が作られてきたことでしょう。また春の花や秋の山を歌おうとすれば、春夏秋冬の季語も歌うことになりすし、春は春、秋は秋のそれぞれの趣にも目が向けられます。そういったことから日本の詩歌に季語が取りあげられるのは、ごく当たり前のことになってきました。

連歌と四季

詩歌の伝統的な形式に五七五七七という音数の和歌があります。これを二分して五七五と七七の形を交互に読み継ぐ連歌が生まれたころから季語というものが意識され始めました。短い形式の詩の内容を豊かにするための約束ごととして季節を表す語を使うのです。

季語は連歌の発句だけを独立させた俳句の中で大いに用いられますが、時代の流れの中で変化していかざる得ない側面も持っています。生活の実態はどんどん変わっていきます。それを歌うためにあった季語も容赦なく古びていき、遣われなくなったものもあります。一方では新しい季語が生み出され、その数は増え続けています。

「歳時記」というものがあります。このようにして出来た季語を集めて分類し、例句などを添えて使いやすくしたものです。でもそれは単に季語を集めて並べただけでなく、我々日本人の美意識やものの感じ方、季節感などがぎゅっと濃縮されて収められています。だからこれをばらばらと拾い読むだけで日本人の精神世界が浮かんでくるのです。

特に連歌は、我々の祖先が古くより使ってきた雅な大和言葉を基調に作っていく物です。単に古くなって意味不明となったからといって捨て去ることはできません。例えば、春の季語に「雁風呂(がんぶろ)」という言葉が残っています。雁の北帰行は春の季語ですが、東北地方では雁は帰路海の上で休むため木片を銜えて旅に立つといわれ、海岸に流れ着いた木片は、途中で力つきた雁が残したものだと信じられてきました。人々はそれを拾い集めて風呂の薪とし、雁たちを供養したといえます。ガスや電気を使う風呂となった現在ではまさに死語といってもいいでしょう。でもそんなやさしい祖

先たちの話を連歌をしながら若い人たちに語ってあげることも大事なことだと思います。
あえてそれらの季語も③季語集では残しております。実作の場で役立ててください。